

## 註

- 1) 森田克行・橋本久和「安満遺跡発掘調査報告書」—9地区の調査—(高槻, 昭和52年)。
- 2) 吉岡博之「長岡京跡昭和53年度発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』所収, 京都, 昭和54年)。
- 3) 高橋美久二・金村允人・森毅「中海道遺跡発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集所収, 向日市, 昭和54年)。
- 4) 飛野博文「山城の弥生後期の土器—京都市左

京区岡崎南御所採集の土器について—」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』所収, 京都, 昭和58年)。

5) 安満の器台の内, 特にBをさす。Aは直線的に開く受部と垂下口縁に長刀鉢町の器台Aとの共通性が認められるが, 脚柱部が太い点で明確に区別すべきである。

6) 下村晴文「鬼塚遺跡発掘調査概要I」(東大阪, 昭和53年)。

## 3 畿内周辺部における弥生時代の石器使用状況

本遺跡からは比較的豊かな弥生時代の石器を出土したが, 土器を伴って遺構から検出されたためにその時期を窺い知れるものが多かった点は特に恵まれていた。

実例を編年的に紹介すれば, 第1~2様式の段階に属するのがS D1003出土の石包丁と抉入柱状片刃石斧, 第2~3様式に属するのがS K1005出土の大型始刃石斧, 第4様式に属するのが弥生溝2出土の磨製石劍・磨製石鎌・柱状片刃石斧・大型扁平片刃石斧, 第5様式に属するのが弥生溝1出土の小型扁平片刃石斧と磨製石鎌である。

本稿で問題にしたいのは石器の終焉状況についてであり, 本遺跡調査によって第4及び第5様式の石器の実例が得られたので若干の問題提起を行ってみようと思う。

従来, 弥生時代は金石併用時代として捉えられ, 石器を利器の中心としながらも青銅器は勿論, 鉄器までも同時に併用されていたことが実際の出土例から確かめられている。但し, 青銅器は急速に祭器化の道をたどり, 銅鐸・銅劍など特殊なものに限定される反面, 日常生活に用いられる農工具の実例は驚く程に少い。同様に鉄器も, その腐食に弱い特性からか意外に実例は多くない。そこで弥生時代の一般的な利器は多くは石によって製作されたものと推測され, その実例も数量的に金属器をはるかに凌ぐ訳であるが, その石器は一体いつの頃まで利器の中心としての座にあったのであろうか。

弥生時代の分期法は前・中・後の3期法が用いられているが, 前中期文化と後期文化を分けるメルクマールとして前者を石器主流の時代, 後者を鉄器が大量に導入され石器の消滅した時代と考えることが広く行われている<sup>1)</sup>。しかし, 石器は単独でその時期を細かく究明することが難しいために, 具体的にいつまで石器が存在するのかということが明確にされなかつたのは, その出土状況に恵まれぬことによるものだともいえそうである。

このことにかかる具体的な記述としては, 小林行雄氏が西ノ辻N地点の土器説明において, 第4様式の最後の段階にあっても大阪府鶴ノ巣山遺跡その他の例からみて, なお重厚な打製石器の豊富な時期と思われる述べている<sup>2)</sup>以外にはほとんど知られていない。

今回長刀鉢町の調査の知見として, 第4様式の段階には武器・工具共に退化的でなく実利的な石器が用いられており, 第5様式中葉においてさえ第4様式からの系譜の追える磨製石鎌と

小型扁平片刃石斧が用いられていたという事実は、周辺部とはいえ畿内地方に属する山城地方の石器の終焉が以外に遅かったことを教えてくれた。

弥生式土器の様式細分法が畿内を中心とする地域と九州地方とで異り、九州地方の第4様式が後期とされている現在、弥生時代後期の文化内容を論じる場合、石器の遺存と、それから推測される鉄器の普及度の低さは十分に論究されなければならない重要な問題点となつてこよう。

同時に古墳時代の到来を待たなければ強力な首長の墓としての高塚古墳が一般的となつたのも、一つには生産性の急激な向上と余剰を生みだすのに不可欠な鉄器の大量導入が弥生時代後期には果たされていなかつたための帰結と考えることもできよう。

#### 註

1 小林行雄「弥生式土器集成図録」(東京、昭和14年)。

2 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡N地点の土器」(『弥生式土器集成』資料編1、所収、東京、昭和33年)。

#### 弥生式土器観察表(102頁～138頁)凡例

- 1 実測図の配列は遺構及び包含層別とした。
- 2 土器番号は一連の番号を用い、記述部分においてもこの番号を使用する。尚、文中では拓影図の土器は丸括りの番号によって実測図土器と区別する。
- 3 観察表には、イ土器番号 口器種 ハ法量 ニ胎土・焼成・色調 ホ形態及び紋飾 ヘ技法 ト備考の各項目を設けた。
- 4 法量については単位(センチメートル)を省略した。
- 5 胎土については包含する砂礫の多寡を以下の記号で示す。  
多い………◎ 少い………▽  
やや多い…○
- これに続けて括弧内に砂礫の大きさを以下の記号で示す。  
小礫………LL 細砂………S

細礫………L 微砂………SS

粗砂………M

その次に包含する鉱物の種類を以下の記号で示す。

石英…S チャート…C 酸化鉄粒子…T 白雲母…U 金色を呈する雲母…K 長石…L 軟質砂岩…N パミス…P 凝灰岩…G 頁岩…E 輝石…I 角閃石…A 黒雲母…B 鉄石英…F

6 焼成についてはその程度を良好・普通・不良に分け、特に良好なものには、堅緻と記す。

7 色調については外面の最も広範囲を占める色を記す。但し、内面の色調が著しく異なる場合にはこれを統けて併記する。

8 備考の欄には出土位置・遺物取り上げ番号・残存率・その他を記す。

9 残存率は図示部におけるそれを記す。